Ⅳ　環境団体等参加による調査の支援

１．概要

市内２か所（西恋ヶ窪緑地及び姿見の池緑地）の調査地点にて、環境団体等を対象に、専門員の指導による動植物調査を観察会形式で実施した。

各調査日に配布した資料は、巻末に別添資料として示す。

表Ⅳ－１－１　観察会の実施状況（令和5年度）

調査期	実施日	調査地点	対象分野	参加人数
春期	5月 25 日(木)午前 10 時～正午	西恋ヶ窪緑地	鳥類・昆虫類	8人
	5月 27 日(土)午前 10 時～正午	姿見の池緑地	鳥類・昆虫類	6人
秋期	10 月 23 日(月)午前 10 時～正午	西恋ヶ窪緑地	植物・昆虫類	6人
	10 月 29 日(日)午前 10 時～正午	姿見の池緑地	植物・昆虫類	20 人(親子参加含む)

２．観察会の状況

■５月 25 日（木）　西恋ヶ窪緑地

・概　要：緑地内にて、鳥類及び昆虫類の調査方法について講義を行ったあと、調査実習を行った。鳥類では地図への記載の練習をしながら、鳴き声を頼りに確認種の識別を行った。昆虫類では生きものを見つけるたびに、その種の生態や識別箇所について解説した。

・観察した鳥類・昆虫類

鳥類では、キジバト、コゲラ、ハシブトガラス、オナガ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ムクドリ、メジロ、スズメを確認した。

昆虫類では、ナミアゲハ、ジャコウアゲハ、ムーアシロホシテントウなどを確認した。

■５月 27 日（土）　姿見の池緑地（国分寺姿見の池緑地保全地域を含む）

・概　要：第１回目と同じ参加者が多かったことから、講義よりも実習を重視して実施した。実習は、池周辺と雑木林の２地点にて、生きものを探すコツを伝えた。最後に、時間内で得られた調査結果をもとに、姿見の池緑地の生物多様性や環境の評価を行った。

・観察した鳥類・昆虫類

鳥類では、カルガモ、キジバト、カワセミ、コゲラ、ハシブトガラス、オナガ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ムクドリ、メジロ、スズメ、ハクセキレイを確認した。

昆虫類では、サトキマダラヒカゲやオオミズアオなどのチョウ類、クロオオアリやトビイロケアリなどのアリ類を確認した。なお、観察会後、ミズイロオナガシジミを確認した。

５月 25 日　西恋ヶ窪緑地

５月 27 日　姿見の池緑地
（国分寺姿見の池緑地保全地域を含む）

■10 月 23 日（月）　西恋ヶ窪緑地

・概　要：植物及び昆虫類の調査について講義を行ったあと、植物班と昆虫班に分かれて調査実習を行った。

・観察した植物・昆虫類

植物では、ヌマトラノオ、ヤマハギ、シャリンバイ、ジュズダマなどを確認した。

昆虫類では、キタキチョウやツヤアオカメムシを確認し、クモ類ではジョロウグモを確認した。

■10 月 29 日（日）　姿見の池緑地（国分寺姿見の池緑地保全地域を含む）

・概　要：親子で参加される方がいたため、クイズ形式を多く取れ入れるなどの工夫を行った。

・観察した植物・昆虫類

植物では、ムラサキシキブ、マンリョウ、シラヤマギクなどを確認した。

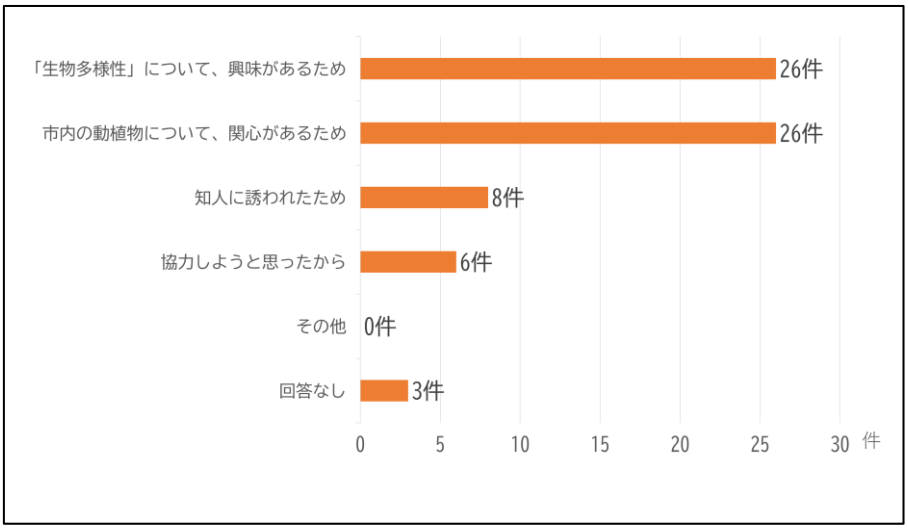
昆虫類では、ホシホウジャク、ヒメジャノメ、ナミテントウ、ダンダラテントウを確認した。

10 月 23 日　西恋ヶ窪緑地

10 月 29 日　姿見の池緑地
（国分寺姿見の池緑地保全地域を含む）

３．アンケート結果

１）今回参加しようと思われた動機を教えてください。該当する箇所にチェックをお願いします。（複数回答可）



図Ⅳ－３－１　参加動機に関するアンケートの集計結果

２）観察会について感想をお聞かせください

（１）調査時期や回数、調査時間

・説明の時間があるので実際の観察が短く感じた。もっと長い方がいい（４件）。
・とても楽しく興味深いものであった。ぜひ定期的に観察会を実施してほしい。
・説明いただいたものが実際に見られて、とても面白かった。
・四季各１回が良い。
・年２回あると良い。
・もう少し早い方が良いと思う（４月）。
・とてもタイミング良く参考になった。
・主婦でも参加しやすい。
・楽しかった。

選択肢		回答数	割合
1	大変良い	22件	61.1%
2	良い	12件	33.3%
3	普通	0件	0.0%
4	少し不満	2件	5.6%
5	不満	0件	0.0%
6	回答無し	0件	0.0%
	全体	36件	

図Ⅳ－３－２
調査時期や回数、調査時間に対する感想の集計結果

（２）調査対象とした場所

・両方ともよかった（２件）。
・鳥と昆虫を別々に実施した方が良い。
・野川沿いも見たい。
・他の場所でも見てみたい。

・多様性があった。
・興味深いエリアで良い場所であった。
・知っているところでの観察ができて良かった。
・日頃よく散歩しているので関心がある。
・場所を増やしてほしい。
・やはり姿見の池は自然が豊かであった。

選択肢		回答数	割合
1	大変良い	23件	63.9%
2	良い	13件	36.1%
3	普通	0件	0.0%
4	少し不満	0件	0.0%
5	不満	0件	0.0%
6	回答無し	0件	0.0%
	全体	36件	

図Ⅳ－３－３
調査対象とした場所に対する感想の集計結果

（３）調査対象種
・色々種類が見られてよかった（２件）。
・鳥と昆虫は、別々に実施した方が良い。
・植物もお願いしたい。
・時間が足りない。忙しい。
・池の中、湿地も見たい。
・水生も見たい。
・鳥もやりたかった。

選択肢		回答数	割合
1	大変良い	19件	52.8%
2	良い	14件	38.9%
3	普通	2件	5.6%
4	少し不満	0件	0.0%
5	不満	1件	2.8%
6	回答無し	0件	0.0%
	全体	36件	

図Ⅳ－３－４
調査対象種に対する感想の集計結果

（４）調査の進め方
・時間が足りない（３件）。
・とてもよかったが、もっと時間が多く取れればさらに良い。また参加したい。
・楽しかった。
・後学習もお願いしたい。
・初めての参加で勉強になった。
・みなさん楽しんでいた。
・クイズがあり、わかりやすかった。
・資料が抜けていた。
・グループに分けたのは、時間が十分あって良い。

選択肢		回答数	割合
1	大変良い	20件	55.6%
2	良い	13件	36.1%
3	普通	0件	0.0%
4	少し不満	1件	2.8%
5	不満	0件	0.0%
6	回答無し	2件	5.6%
	全体	36件	

図Ⅳ－３－５
調査の進め方に対する感想の集計結果

３）今回の観察会の全般に対し、よかったと思われる点、不足していたと思われる点はありますか。

（１）よかった点

・専門の方と歩くと、分かりやすく勉強になりました（11 件)。
・レクチャーを受けながら実物を見つけることができたので楽しかった！（３件)。
・今までと違った見方ができて良かった（２件)。
・クイズ形式もよかったし、具体的な実践も多く楽しかった（２件)。
・実際に観察しながら説明を受けられとても楽しかった。専門家の方からお聞きする話は面白く、ひきこまれた。生物多様性がつながりあっていることがよくわかる会だった。
・日頃見ていた鳥・鳴き声の説明が聞けて良かった。
・知らない植物、昆虫などを知ることがよかった。
・身の回りの草花の生態が分かり嬉しかった。
・木の種類をしぼって、その中の動植物の関係を説明してくれたこと。
・様々な生物がいた。
・初心者として調査というものを理解できた。
・ありがとうございました。
・２班に分かれてより専門的にできたところ。
・参加人数が適当だと思う。
・また来て自然観察をしようと思った。

（２）不足していた点

・時間が足りない（８件)。
・場所がたまたま植物も昆虫も同じだったので変えて欲しかった。
・この場所に特化した話題。
・地球温暖化の問題との関係を説明してもらいたかった。
・私自身の知識。名前も種類も不明だった。

４）今回の観察会で行った調査を、今後の貴団体の活動等に取り入れることは可能ですか。

（１）はい

・できれば取り入れたい（４件)。
・わかりやすいところは児童に伝えたい（３件)。
・昆虫や鳥の観察プログラムも子供たちに実施するので、参考になる。
・まず記録を取るようにする。
・樹木名、草本名も掲示できるようにする。
・日々、草木を伐採しているから、その植物の意味を考えたい。
・もう一度改めて観察に来て撮影をしたい。
・調査リストを作成する。
・自然塾で取り入れたい。

（２）いいえ

・主に植生（下草刈り等）の維持管理のため。
・あまりに雑ぱく。

５）今後どのような生きものに関するイベントがあったら参加しますか。下記にご記入ください。

・野鳥の観察会を希望する（５件)。
・水中の生きもの（３件)。
・また参加したい。
・楽しいイベント。
・緑地保全。
・季節ごとにあると良い（専門家に案内していただく観察会)。

６）今後、動植物調査について、市に期待することは何かありますか、また、具体的な提案はありますか。

・毎年何回か観察会を実施して欲しい（５件)。
・春にして欲しい（２件)。
・この様な専門家の説明会をもっと開いてほしい。
・定期的な実践。
・より詳細な調査。
・実態調査の結果写真（実物）を入れて公表してほしい。
・多いに市民に参加していただき、市と市民の間で（生きものの）発見を共有できればと思う。

７）環境団体同士の連携・ネットワークの構築を図るためには、何が必要だと思われますか。（複数回答可）

□市による連絡会開催などの機会の設定	12件
□団体が交流等を目的として自主的に集まれるよう場所や情報の提供	9件
□各団体の活動情報などを一覧できるような仕組み	11件
□その他（具体的にご記入ください。）	0件

図Ⅳ－３－６　選択肢一覧とその回答数

８）動植物調査を含め、環境施策について、ご意見・ご提案等がございましたらご記入ください。

・環境を壊さないような工事を望む（新次郎池の工事)。
・もう少し時間があればよかった。鳥の声などを知ることができ、もう少し勉強したい。
・ハシボソガラスの捕食を見ることができて良かった。
・ありがとう。

以上のアンケート結果から、専門家のお話が聞けてよかったという声が多数あった。特に、今まで知らなかった植物や昆虫の名前や生きもの同士の繋がりについて、興味深く楽しかったという意見が多く好評であった。今後もこの取り組みを持続するとともに、要望のあった野鳥や水生生物の調査も実施できると良い。

改善点としては、「鳥類と昆虫類」「植物と昆虫類」と２つの分類群を一度に観察したためか「時間が短い」という意見が多数見受けられた。今後実施する際には「時間を長くする」「テーマを絞る」「実施回数を増やす」などの対応を検討したい。

Ⅴ　動植物調査報告会の実施支援

１．概要

令和５年度動植物調査の結果を市民と共有し、身近な自然や生きものへの関心を高めるとともに、今後の生物多様性地域戦略に向けて市の取組を周知するため、報告会を実施した。当日は、スライドや調査結果の概要版（配布資料）を用いながら、市職員から全体概要を説明した後、各専門員から専門員調査の結果概要を説明し、質疑応答後、今後の改善策の説明を行った。

表Ⅴ－１－１　報告会の実施状況　※午前の部・午後の部、同内容

回数	実施日	会場	参加人数
午前の部	３月 24 日（日）午前 10 時～正午	市役所プレハブ会議室第一	５人
午後の部	３月 24 日（日）午後２時～午後４時	同上	13 人

報告会の様子（その１）

報告会の様子（その２）

２．参加者からの質疑・応答

■午前の部

＜植物について＞

・シードバンク（埋蔵種子）はどのくらいもつのか。

→（専門員）種は落ちた後、その年に生えなくても生きている。植物の種類によって変わるが、約 50 年間は生きて発芽できる。

＜鳥類について＞

・国分寺市では、オシドリがつがいでいることが少なく、オスが多い。

→（専門員）オシドリは木の洞で子育てをするため、そういうところがあると今後繁殖するかもしれない。

・コサギとダイサギの違いの見分け方を教えてほしい。

→（専門員）足指が黄色だとコサギで、黒色だとダイサギになる。ダイサギの嘴は季節で色が変わるので足の色で判断すると良い。また、足の動きが速いのがコサギで、じっくり構えているのがダイサギになる。

・西町でツミ（鷹の仲間）が鳩を食べたのか、羽が落ちていたが、そのままにしても大丈夫なのか。
→（専門員）ツミは獲物を捕らえたらネコなどに横取りされないように自分の解体場所にもっていく傾向がある。森と開けたところが両方あるところを好む習性があるので、西町では結構な確率で捕食された死骸が見つかっている。基本的にはそのままにして大丈夫。
・市内で去年３月までクイナ（鳥類）の観察ができたが、今季は見られなかった。
→（専門員）本来クイナはとても警戒心が強く、ひっそりとしたところにいる。今季は見えない場所で活動していたのかもしれない。環境的には、水辺の人が隠れるくらいの葦原を好む。観察できなかったからといって別の場所に移動したと断言はできない。

＜哺乳類・昆虫類・水生生物等について＞

・魚類のカワムツとアブラハヤの見分け方や生息場所を教えてほしい。
→（専門員）色味を見て鱗の並々模様がしっかりしているのがカワムツである。鱗（うろこ）が細かく、目視で鱗が見えないのが、アブラハヤである。背中から見た場合、カワムツには背びれ付近に赤い（オレンジ）模様がある。アブラハヤにはそれがない。また、アブラハヤの方が、警戒心が強いため、人が近寄ると隠れる傾向にある。姿見の池の用水路部分は全体的にほぼアブラハヤだった。
・黒鐘公園に池があって、オニヤンマ等が飛んでいたが、調査範囲に入っていない。
→（専門員）新しい調査ポイントとして、広げていけたらと思う。
・蛍の幼虫は確認されなかったのか。
→（専門員）蛍の幼虫は確認できなかった。土の奥深く潜るので、なかなか見つけにくい。
・ゴマダラカミキリは外来種か。庭のバラの根本の茎が切られて、とても迷惑している。
→（専門員）ゴマダラカミキリは在来種であり、イチジクやクワの木などで、立ち枯れになるかならないかの木を好む。

＜全体を通して＞

・湧水の流水量が減っているとの話があったが、どの辺りのことか。
→（専門員）武蔵国分寺公園の南側閉鎖区域の湧水のことで、前回調査よりも減っている印象だった。また、史跡ガイドさんも同じことを話していた。
・小学校のコミュニティスクールでいろいろやっているが、中学校や高校でも地域と連携して何かできれば、もっと生物多様性に興味関心をもってもらえると思う。
・今回の調査で、姿見の池の外来種のニシキゴイが問題になっているのが明らかになったが、それを取り除く方法が知りたい。かいぼりをすれば良いと思っている、このことで水生生物が増え、在来の植物の種子が残り繁殖するということがわかった。それを実現するにはどうすれば良いか。
→（専門員）ニシキゴイについて、市民の中にはコイが生息していた方が良いという人もいるかもしれない。その場合、例えば、網や柵などで池の一部をゾーニングして囲い、コイが生息できる範囲を限定する方法が考えられる。ただし、生きものを狭い場所に閉じ込めているという見え方もするので工夫が必要になる。どのように対応するのか関係者との合意形成を図る必要がある。

→（専門員）かいぼりについて、かいぼりをすると外来種だけでなく、在来種も捕獲後に死んでしまうことも多くある。それを踏まえて市民の方の理解が必要になってくると思う。また、かいぼりをどの段階までやるのか、何を目標とするのかということが重要になる。ただかいぼりをやるのではなく、到着地点を市民の方に理解していただくことが必要になると思う。

・確認種一覧には、外来種でシャガやクレソンが確認できていないようだが、どのような扱いになるのか。

→（専門員）シャガに関しては、今回確認しているが、生態系被害防止外来種リストには該当していない。クレソンに関しては、オランダガラシという種名で、重点対策外来種として掲載している。

・確認種一覧の中で、鳥類と昆虫類などの種は季節ごとに記載があるが、植物に季節の記載がない。何か理由はあるか。

→（専門員）季節ごとによって確認できるものとできないものがあり、植物については、全季節を通して記載している。報告書に掲載する際には、どうして鳥類や昆虫類が季節を分けて記載しているのか、理由を一文入れ、分かりやすくする。

■午後の部

＜植物について＞

・史跡公園に植物が多くて生育して良いと思うが、数年前に咲いていたミツバツツジが草刈に合わせて切られてしまった。なぜ刈ってしまったのか、外来種対策のためか。

→（市）史跡武蔵国分寺跡のことか。どのような経緯で刈ってしまったのか、可能な限り担当課へ確認してみる。後ほど詳しい場所を教えてほしい。

・外来種のクレソンについて、これも駆除した方が良いか。

→（専門員）クレソンは繁殖力の強い外来種になるので、少しある分には良いが、増えてしまうと在来種を圧迫してしまう。有効活用できる駆除の方法があれば良い。

＜鳥類について＞

・国分寺市内にツバメはいないのか。

→（専門員）各調査地点で確認をしている。ツバメは飛ぶ昆虫をよく食べるので、飛ぶ昆虫がいること、巣づくりにする泥があればツバメは棲みつく。

・外来種のガビチョウが定着した理由は何か。

→（専門員）最初は江戸時代に中国大陸から持ち込まれた飼育用個体が逃げ出して、山から内陸に進出して増えた。

・鳥類調査の時間帯を教えてほしい。

→（専門員）早ければ早いほど良いので、朝７時から開始し、午前中に調査が終わるようにしていた。なぜ早い方が良いかというと、鳥たちは飛ぶために体重を軽くしなければならない。朝すぐ行動するので、早朝調査した方が見つけやすい。また、人が活動しない時間帯はよく鳴き、人が行動する時間帯は姿を見せなくなる傾向があるので、日の出から調査するのが理想である。

・笹を刈ってガビチョウをどけた場合、そのガビチョウはどこにいくのか。

→（専門員）ムクドリも同じで、この場にはいなくなるが、他の場所に移動する。問題は、ウグイスもガビチョウと同じ場所が好きなので、笹を全部なくさずにウグイスが棲める環境を作らなければいけない。庭のエサ台に野鳥が来ているようなら、エサ籠の隙間を狭くしてガビチョウが入れないようにするということはできると思う。

＜哺乳類・は虫類・両生類・昆虫類・水生生物等について＞

・ヒグラシはスギなどの林でよく見られる。針葉樹がないような雑木林でもヒグラシは成長することができるのか。境界木だった古いサワラが切られてしまったが、そういった針葉樹がない樹林地でもヒグラシは繁殖できるのか。

→（専門員）ヒグラシに関しては、日照と湿気が重要になる。元々ヒグラシはスギ林などの暗い場所を好むが、そこが明るくなった場合、そこに生息できるかどうかは分からない。

・他の種類に比べてヒグラシの生息地が少ないことが心配である。

→（専門員）国分寺市で、ヒグラシの生息が確認できているところには、一定の暗さがある。姿見の池は管理ができているので、明るい森になる。西恋ヶ窪緑地も樹木更新して明るい森になりつつあると思う。これからヒグラシがどうなっていくのか追っていくのは良い視点だと思う。

＜全体を通して＞

・毎年調査をやっても良いと思うが、なぜ５年に１度に行うのか。ルールがあるのか。

→（市）毎年の変化を調査することが理想だが、市の予算や他の事業等の関係があり、３～５年を目安に動植物調査を行えればと考えている。先進自治体の杉並区では、既に８次の調査を行っており、こうした事例の調査頻度を参考にしながら、おおむね５年を目安にしている。

前回調査が平成 27 年度なので、本来であれば、５年後の令和２年に実施したかったのですが、新型コロナウイルス等の影響もあり実施できず、今回８年ぶりの調査となった。次回の調査についても、おおむね５年以内に実施することを考えている。

・お金をかけなくても調査は実施できると思うが。

→（市）将来的には、市民の方の情報提供や企業・大学の関係者の方にご協力いただきながら、なるべく費用がかからない形で実施できればと思う。また、市民の方の協力が非常に重要になっている。最近の他自治体の事例では、精度や種類の偏りの課題はあるものの、携帯のアプリを通じて情報を集める市民参加型の調査もある。

・外来種のアメリカザリガニを駆除するために、積極的に食材にした方が良いと思うが、どのように調理したら良いか。

→（専門員）北米原産でアメリカザリガニは元々食用だった。戦時中ウシガエルを養殖する際のエサとしてアメリカザリガニを仕入れたのが、アメリカザリガニもウシガエルも売れなくなり、アメリカザリガニが捨てられたため全国に広がった。日本でもザリガニを食用にということは聞くし、食べたこともあるが、エビと変わらない。ただ、身が少なく、人によっては泥臭さを感じるので、１週間程度泥抜きをしなければならない。殻が厚くて剥きにくいという特徴もあるが、火を通せば食べることができる。食用として広がれば、外来種の有効活用ができると思う。唐揚げにするとおいしい。また、砕いて肥料にする活用方法もある。

・今回の調査の７地点の中で、そのうち２か所が東京都の管理になっている。管理面の違いが調査の中で感じられた点があれば教えてほしい。

→（専門員）管理者から委託された業者のレベルと労力があるので、武蔵国分寺公園については、常駐のレンジャーの方がおり、公園としてもともとのポテンシャルが高い上により良い管理がされているという点で評価が高い。東京経済大学については、鳥が良かったが、管理によってはさらに良いものができると思った。

昆虫類についても、面積に比例して確認種は多い傾向である。平兵衛樹林地は面積が小さく植生が単一化されたサワラやスギが多いため、単調な印象で、対して西町緑地は面積がそこまで大きくないが、色んな樹種があるため、確認種数が多かった。

植物で言うと、エックスの山、姿見の池、武蔵国分寺は、何を目的に活動しているのかが明確になっている。守るべきものを決めており、それに向けた管理をしているような印象を受ける。東京経済大学については、池の近くをメインに管理していて、奥にどんぐりの森と呼ばれる林があるが、そこが手つかずになり、外来種もそのままになっていた。西町緑地等、何を守るかどう活用するかを決めて管理の方針を決めることで、確認種は増えるのではと思った。

・公園の手入れについて、具体的に市として、今後どのように進めていこうと考えていますか。

→（市）今回の調査結果を踏まえて、公園・緑地の管理がどのようにできるのか。管理する側からすると、一律剪定した方が管理しやすいという側面があるが、生物多様性の保全に配慮した管理という面では、武蔵国分寺公園のばったランドのようなバッタが生息できるように下草を一部意図的に残している管理方法が取り組まれている例もある。今回の調査結果を庁内関係課と共有しながら、外来種の防除をどうしていくのかを含め、今後、協議調整して方針と立てながら管理していければと思う。

・武蔵国分寺公園やエックス山はどこが管理をしているのか。

→（市）都立武蔵国分寺公園は東京都が所有し、指定管理者が管理をしている。一方で西恋ヶ窪緑地は市の緑と公園課が所管課であり、市民協働として環境団体の方と一緒に管理している。

・どこがどのように管理をしているのか分かるような発信等があると興味を持ちやすい。

→（市）市民の方に関心をもってもらえるよう、効果的な情報発信について検討していきたい。

Ⅵ　調査結果のまとめ（専門員の考察）

１．確認種について

各分類群の調査結果を以下に表Ⅵ－１－１～２にまとめる。

今回の調査では、すべての分類群を合わせて 1,300 種以上の動植物が市内に生育・生息していることを把握することができた。最も種数が多い分類群は植物の 634 種であり、ついで昆虫類の 546 種、クモ類の 64 種であった。

また、平成 27 年度以降、８年ぶりに第２回目となる市内の動植物調査を実施したことで、新たに 580 種の生物を記録することができた。生息種数は多いが、体サイズが小さく比較的発見しにくい地表徘徊性昆虫類やクモ類、移動の際に短期間の立ち寄りもある鳥類などは、今後も調査を継続することで確認種数が増えることが十分に予想され、環境の変化も把握することができる。

表Ⅵ－１－１ 国分寺市動植物調査で確認した種数などの一覧　その１

分類群		確認種数	希少種		外来種
			国RL	都RL	生態系被害防止外来種リスト
植物		634（531）	３（３）	９(７)	39（29）
鳥類		48（37）	２（２）	15（10）	２（２）
哺乳類		３（１）	０（０）	０（０）	１（０）
は虫類		３（８）	０（１）	２（７）	１（１）
両生類		０（１）	０（０）	０（０）	０（０）
昆虫類		546※（354）	１（０）	7※（10）	１（１）
クモ類		64（60）	１（１）	２（１）	０（０）
水生生物	水生昆虫類	24（19）	０（０）	３（２）	０（０）
	魚類	7(7)	１（１）	２（２）	０（１）
	その他	14(12)	０（０）	３（１）	２（１）
合計		1,319(1,030)	８（８）	40（40）	46（35）

※（　）は前回平成 27 年度の確認数。

※昆虫類には水生昆虫も含むため、各合計には水生昆虫類の数を除く。

※希少種の確認種数は、調査時点での国または都のレッドリスト掲載種をカウントした。なお、植物の植栽種は希少性の評価の対象外とした。

※シュロは九州南部に自生するが、それより以北では一般的に生態系被害防止外来種に扱われるため、平成 27 年度調査のシュロを上記外来種の確認数に含めることとし、28→29 に訂正した。

※平成 27 年度調査で確認された魚類の外来種について、当時の調査では「カラドジョウ属」としたが、改めて当時の写真資料を確認しカラドジョウと同定した。その結果、カラドジョウが生態系被害防止外来種リストの「その他の総合対策外来種」に指定されているため、平成 27 年度調査の水生生物（魚類）の上記外来種の確認種数を０→１に訂正した。

表Ⅵ－１－２ 国分寺市動植物調査で確認した種数などの一覧　その２

分類群		令和5年度調査で初めて確認された種数	平成27年度と令和5年度調査総確認種数
植物		182	713
鳥類		15	52
哺乳類		2	3
は虫類		0	8
両生類		0	1
昆虫類		342	696
クモ類		23	83
水生生物	水生昆虫類	11	30
	魚類	1	8
	その他	4	16
合計		580	1,610

２．希少種について

専門員調査で確認された希少種のうち、国 RL 掲載種の一覧を表Ⅵ－２－１に、都 RL 掲載種の一覧を表Ⅵ－２－２に示す。

１）国ＲＬ掲載種

国 RL 掲載種では、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧の２カテゴリーに、合計８種が該当していた。

国 RL で最も高いカテゴリーは絶滅危惧Ⅱ類であり、植物はキンランのみであった。キンランは腐葉土の多い樹林の林床に生育する植物である。準絶滅危惧種のタシロランも落ち葉がかなり厚く積もり、湿り気がある場所に生育する。これらラン類は盗掘の恐れもある種が含まれており、生育地の情報の扱いについては慎重であることが望ましい。サシバについては、移動途中の５羽を確認したと考えられるが、北多摩では過去に繁殖記録があることから、生息状況を注視していくことが望まれる。

準絶滅危惧種のオオタカについては、近年では規模の大きな都市公園などでも繁殖が記録されるようになり、市内でも繁殖する可能性がある。

コシロシタバについては、雑木林を代表する種であり、姿見の池緑地のみの確認であった。

キシノウエトタテグモについては、前回調査で記録された調査地では確認できなかった。過度な踏圧による乾燥化が影響を及ぼした可能性がある。

ドジョウについては、かつては都市部の水田地帯に多く生息していたが、開発による生息環境の消滅や、外国系統のドジョウとの競合や交雑が心配される。

哺乳類、両生類、は虫類では、該当種は確認されなかった。

表Ⅵ－２－１ 国分寺市で確認した国 RL 掲載種の一覧

カテゴリー	植物	鳥類	昆虫類	クモ類	水生生物	合計
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	キンラン	サシバ　◎				2
準絶滅危惧（NT）	タシロラン　◎ カワヂシャ　◎	オオタカ	コシロシタバ	キシノウエトタテグモ	ドジョウ	6
合計	3(2)	2(1)	1	1	1	8

※（　）の数字は今回の調査で初確認された種数。

※植栽種は希少性の評価の対象ではないため、市内の生物多様性の評価としては自生種のみを取り扱う。

２）都ＲＬ掲載種

２）都ＲＬ掲載種

都 RL 掲載種では８つのカテゴリーに、合計 40 種が該当していた。このうち、準絶滅危惧が 15 種と最も多く、次いで、絶滅危惧Ⅱ類の 14 種、情報不足と留意種の３種であった。

分類群で最も多いのは、鳥類の 15 種であった。次いで、植物の９種、昆虫類の７種だった。哺乳類と両生類では該当種は確認されなかった。

絶滅のおそれのある種（絶滅危惧種）について、以下に述べる。

①絶滅危惧ＩＡ類

サシバについては、先述の通りである。

②絶滅危惧ＩＢ類

ギンランは森林のやや乾いた林床に生育する植物であり、管理者によって保護がされていた。

ヤナギハムシは１ヵ所でのみ確認されたが、ヤナギ類があれば、その他地域でも移動定着する可能性がある。

③絶滅危惧Ⅱ類

アイアスカイノデは低地から低山地にかけての樹林内や林縁に生育する植物である。キツネノカミソリは、明るい林床を好むため、良く管理された里山環境で見られた。カワヂシャは特定外来生物であるオオカワヂシャとの混雑が懸念される。

モズについては、北多摩ではやや回復傾向にあると考えられており、前回調査と比較しても確認地点は多く、繁殖も確認された。

昆虫類ではヤマサナエが注目され、繁殖もしている可能性が高い。

表Ⅵ－２－２ 国分寺市で確認した都 RL 掲載種の一覧

カテゴリー	植物	鳥類	は虫類	昆虫類	クモ類	水生生物	合計
絶滅危惧ⅠA類（CR）		サシバ ◎					1
絶滅危惧ⅠB類（EN）	ギンラン			ヤナギハムシ ◎			2
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	アイアスカイノデ キツネノカミソリ カワヂシャ ◎	カイツブリ カッコウ ツミ オオタカ フクロウ ◎ モズ コサメビタキ ◎	ヒガシニホントカゲ ニホンカナヘビ	ヤマサナエ ◎ ネグロセンブリ		ヤマサナエ（幼虫）◎ ネグロセンブリ（幼虫）	14
準絶滅危惧（NT）	キンラン ササバギンラン ノカンゾウ ニリンソウ	アオバト ◎ コサギ ◎ カワセミ オナガ オオルリ ◎		ヤマトクロスジヘビトンボ コシロシタバ ヤマトタマムシ ◎ アカアシオオアオカミキリ ◎	キシノウエトタテグモ	ヤマトクロスジヘビトンボ（幼虫） アブラハヤ	15
情報不足（DD）		クイナ ◎			トゲグモ ◎	ドジョウ	3
留意種（＊）						スジエビ ◎ ヌカエビ サワガニ	3
データ無し（－）	キクムグラ ◎						1
非分布（・）		ツツドリ ◎					1
合計	9(2)	15(8)	2(0)	7(4)	2(1)	8(2)	40(17)

※（ ）の数字は今回の調査で初確認された種数。

※ヤマサナエ、ネグロセンブリ、ヤマトクロスジヘビトンボの３種は、昆虫類調査と水生生物調査の両方で確認されているものの、昆虫類としてカウントすることから重複する３種を合計数から除く。

※植栽種は希少性の評価の対象ではないため、市内の生物多様性の評価としては自生種のみを取り扱う。

３．各調査地における専門員の考察及び管理の提案

１）西恋ヶ窪緑地

（１）植物

確認種は 281 種であり、前回調査の 248 種よりも増加傾向で推移している。希少種は管理者により保全され、個体数を増やしている。外来草本の選択除草も行われていた。

南側入口の斜面は明るい草地になっており、そのような場所を好むカントウタンポポやワレモコウ、タカトウダイなどが確認された。雑木林と隣接する草地として貴重なため、維持したい環境である。

林内の地表は日差しが良く届く良い環境である。ナラ枯れ被害があるが、コナラ、ムクゲ、コウゾ、クヌギなどの次世代の若木が育てられており、良く整備されている。それぞれの区画の環境に適した種を保全し、その位置を把握して保全している点、全体的にアズマネザサを刈り取って生育を抑えている点も評価される。

外来種では、ツルニチニチソウ（重点対策外来種）が前回調査から継続して地表を覆っているほか、外来種のコセンダングサも増加している。ツルニチニチソウは常緑のため、他の草本類の芽生えや生育を阻害しているおそれがあり、目立ちやすい冬期のうちに除草することが望ましい。

その他の外来種の駆除では、草本類や一年草は駆逐が難しいので、ヨウシュヤマゴボウ、セイタカアワダチソウ、トウネズミモチなど選択的に駆除を行う。特にトウネズミモチは高木もあるため切っても良い。また、園芸品種を入れない（植えない）方が、里山としての価値が高いため極力入れないことが望ましい。

緑地の管理は市民団体の方々が大変丁寧に管理をされている。

繁茂するツルニチニチソウ
（4月 28 日　西恋ヶ窪緑地）

トウネズミモチの結実
（10 月 16 日　西恋ヶ窪緑地）

（２）鳥類

鳥類の確認種は 18 種であり、前回調査の 21 種よりも減少し、前回記録された猛禽類は見られなかった。

しかし、エナガやコゲラ、シジュウカラなどの樹林性の種の繁殖行動が確認されるなど、西恋ヶ窪緑地は市内に生息する鳥類にとって貴重な繁殖地と評価される。

樹林の下層は明るく、人の通行も多いことから、緑地の一部の草刈頻度を下げるなどして高茎草地を創出すると、鳥類の隠れ家となる。

（３）哺乳類・は虫類・両生類

哺乳類については今回の調査では確認できなかった。これは調査精度の問題もあると思われる。

そのほか、哺乳類の情報としては、本市の「令和４年度アライグマ・ハクビシン防除事業」によって、隣接する地域（西恋ヶ窪三丁目）においてアライグマの捕獲記録があった。これは調査対象の西恋ヶ窪緑地を活動範囲とする個体の可能性が高い。

は虫類については、下草が豊かなことや管理作業で出た伐採木の積載等が獲物となる昆虫やクモ類の生活空間となり、これら小動物が安定的に見られることからは虫類の生息環境としては適しているようである。現状行われている管理形態が維持されることが望まれる。

目立った水辺環境がないことから両生類は確認できなかった。周辺の住宅地にまだアズマヒキガエルが生息していれば、小さな池などの水辺があれば繁殖する可能性がある。

（４）昆虫類・クモ類

昆虫類は 183 種で、前回調査の 156 種と比べて微増している。平地の雑木林で見られる種が多く確認されており、良好な管理活動によって雑木林が維持されていることが大きいと思われる。

林内にはノコギリクワガタやカミキリ類などが生息しており、樹木更新された明るい区画ではハムシ科やガ類が見られるなど、環境の多様化によって昆虫類の生息に好影響を与えているようである。

関東地方でカシノナガキクイムシによって目立った被害をもたらされている「ナラ枯れ」であるが、若木よりも大径木が特に被害を受ける上、一度食害を受けた樹木は対処療法的に被害を遅らせる程度の対応しか手がないのが現状である。現在緑地内に残っているコナラの大木については倒木などによる人的被害に注意を払いつつ、立ち枯れするものは自然にまかせ（危険な場合は伐採）、次世代の若木の導入と、これから先の樹木管理について検討できると良い。

クモ類についても昆虫類同様樹林性の種が見られ、良好な樹林が両者の緊密な捕食・被食関係を維持させている。

２）姿見の池緑地

（１）植物

確認種は 401 種であった。種数については、前回調査は 298 種であり、増加している。

段丘上の雑木林は、ナラ枯れ被害で伐採された樹木も多く、樹林の乾燥化などに伴う今後の生物相の変遷が注目される。市民団体の方が丁寧に管理されており、各区画で次世代の若木が育てられている。希少種についても位置を細かく落とされている。

姿見の池の湿地には希少な水生植物があるが、植栽と思われるものが多い。その土地由来の植物か DNA 鑑定が望ましい。国分寺市は国分寺崖線により湧き水が多い地域なので、水生植物及び水辺環境は今後注目すべきカテゴリーである。

課題は水路の外来種対策である。中でも急務は、特定外来生物のオオカワヂシャである。種子の伝播による下流への影響が懸念され、かつ水路のみならず隣接する湿地に入り込めば、根絶は難しいと予想される。葉の鋸歯が不明瞭で花が青紫色であれば本種と判断し、種子をこぼさないようビニール袋に入れるなどしながら抜き取る必要がある。

同時に、水路で確認されたオランダガラシ、メリケンガヤツリ、キショウブ、ノハカタカラクサはいずれも重点対策外来種で増えやすいため、これらも抜き取りにより除草することが望ましい。キショウブは植栽からの逸出で湿地帯にも広がっている。

北側の元梅林（東京都環境局の保全地域の指定状況より）は、木本類は植栽のため、樹林というよりはカントウタンポポやサギゴケが生育する低茎草地として維持できると良いと考えられる。セイヨウタンポポはカントウタンポポと交雑するため、セイヨウタンポポが付近で生育していた場合は除草することが望ましい。

オオカワヂシャ（青）
（4月 28 日　姿見の池）

繁茂するノハカタカラクサ
（7月 14 日　姿見の池）

（２）鳥類

鳥類の確認種は 30 種であり、前回調査の 26 種よりも増加傾向であった。

東側の雑木林ではエナガやシジュウカラの幼鳥が確認されており、樹林性の種に繁殖地として利用されていた。

姿見の池では、アオサギやカルガモ等の水鳥が確認されたため、水鳥の食物資源となる小型魚類が一定数生息していると思われる。

（３）哺乳類・は虫類・両生類

哺乳類の確認種は２種、は虫類では２種、両生類は確定できなかった。前回調査同様に、雑木林内及び池畔の林床ではアズマモグラの塚を頻繁に確認することができた。食物となる土壌生物相が比較的充実しているものと思われる。林道沿いでは外来種であるハクビシンのものと思われる糞が見られた。外来種に関しては、委託事業の「令和４年度アライグマ・ハクビシン防除事業」で、姿見の池緑地からはやや離れているが同じ町域（西恋ヶ窪一丁目）で、アライグマの捕獲記録があった。この周辺は緑地が多いため活動範囲としていた個体と思われる。おそらく姿見の池緑地周辺も生活圏として利用されている可能性が高い。

今回調査ではミシシッピアカミミガメ以外、は虫類・両生類の確認は少なかったが、前回調査の頃から緑地環境に大きな変化は認められないので、潜在的にニホンスッポン、アオダイショウ、ヒバカリ、アズマヒキガエルといった種は生息していると思われる。これらは昼間の目視調査での確認が難しい生物類であり、別途計画的な調査が必要と思われる。特にアズマヒキガエルについては、成体の確認調査に加えて池での繁殖行動が確認できれば調査精度が上がると思われる。

（４）昆虫類・クモ類

昆虫類の確認種は 209 種、前回調査の 138 種よりもやや増加している。トンボ科やヨコバイ科、ハムシ科、シャクガ亜科などの新たな確認種が増えたことなどが影響していると思われる。雑木林を特徴付ける種も記録されたことから、林内における適切な管理作業の実施を示しているといえる。

クモ類の確認種は 26 種で、前回調査の 26 種と同じだった。

昆虫類・クモ類に関しては、引き続き現状の管理が継続されることが望ましい。

（４）水生生物

水生昆虫類は 18 種、魚類は７種、その他の水生生物類は９種であり、前回調査では水生昆虫類７種、魚類７種、その他の水生生物類６種よりもやや増加している。用水路と池を組み合わせた水域を復活させた姿見の池緑地は、武蔵野台地の豊かな水源をもとにして良好な環境を維持している。用水路ではコオニヤンマ、オニヤンマといった大型のトンボ類を新たに確認しており、引き続き良好な水域環境の維持が求められる。

魚類についてはジュズカケハゼ類が前回調査から継続して確認されており、安定的に生息しているものと思われる。池では、東側にある抽水植物の根際にできた狭い窪みがあることによって大型のコイ（ニシキゴイ）の捕食から逃れているようである。

池はコイが優占しており、沈水植物や水生生物類（メダカやモツゴの稚魚等）の捕食や底泥の攪拌による悪影響が懸念される。周辺住民等との兼ね合いもあると思われるが、コイを排除できれば、池における生物相の多様化が期待できる。

３）東京経済大学

（１）植物

植物では、確認種は 280 種であった。前回調査は 232 種であり、増加で推移している。

学生や地域住民などが管理作業をしている場所のため、外来種であるトウネズミモチやシュロは少なかった。

今後の課題として林床管理が挙げられる。特に東向きの斜面は薄暗く、耐陰性のあるノハカタカラクサ（重点対策外来種）が地表を覆っている。ノハカタカラクサは常緑のため、葉が目立つ冬期に除草できると良い。引き抜きは容易だが、節から発根するため丁寧に取り除く必要がある。

加えて樹林全体で優占しているアズマネザサやウバメガシの様な常緑樹などを、刈り取りにより高さや密度を抑えることで、希少種やその他の草本類の増加、木本類の実生の発芽生長による階層構造の発達などが期待できる。水辺ではセキショウが繁茂しているため、水面が見えるように間引くことで、その他の草本類の増加が期待できる。

林全体の土壌は乾燥傾向にあり、秋の調査では土を掘り返しても菌糸が見つからなかった。ミズキが多いことから地下には水源があるが、土壌の保水能力が低いと思われる。そのため、ラン類にはいい環境とは言えない。可能であれば、伐採した木や落ち葉などを溜めて腐らせ土壌を作れば、今後改善される可能性がある。

植物相から見ても、さらに多様性の高い林床を形成するポテンシャルは有していると考えられるため、一部の区画だけでも、アズマネザサ等の刈り取りや、落ち葉を利用した土壌の改善などの管理の実施が望まれる。

繁茂するノハカタカラクサ
（7月 12 日　東京経済大学）

（２）鳥類

鳥類の確認種は 28 種であり、前回調査の 16 種よりも大幅に増加した。

市内では渡りの時期に一時的に通過する種であるヒタキ類が飛来し、渡り鳥の休息地として利用されていた。また、樹林性の種は繁殖地としても利用し、ヒヨドリやエナガ、シジュウカラの繁殖が確認された。

東京経済大学の周辺には庭付きの戸建て住宅が多く、大学に近接する庭と行き来する鳥類も見られた。大学周辺の緑地環境のポテンシャルが高いことも、鳥類の確認種数が多かった要因として挙げられる。

前回調査では冬鳥であったウグイスが、今回調査では通年で見られた。樹林の林床がアズマネザサに覆われ、ウグイスにとって生息しやすい環境になったと思われる。しかしながら、同様の環境を好むガビチョウ（特定外来生物）も定着しているため、ウグイスの繁殖への影響が懸念される。植物の項目でも述べたが、樹林全体で林床に繁茂するアズマネザサなどを刈り取りにより高さや密度を抑えることが望ましい。

（３）哺乳類・は虫類・両生類

哺乳類の確認種は２種で、前回調査では１種であり、ほぼ同じであった。南側の国分寺崖線に面した斜面林において、アズマモグラが前回調査同様に見られた。土壌が比較的安定していると思われる。今回の調査では前回調査で記録のなかったハクビシンのものと思われる糞が新次郎池周辺において確認されている。

は虫類は２種であり、前回調査は２種で同じであった。新次郎池周辺は前回調査以後に整備された経緯があり、環境変化が考えられるが、斜面林については大きく変更されてはいない。新次郎池では数年前にアズマヒキガエルが産卵行動をしていた情報もあるので、潜在的に生息していると思われる。

（４）昆虫類・クモ類

昆虫類の確認種は 164 種であり、前回調査の 134 種よりもやや増加傾向であった。サトキマダラヒカゲやヒラタアブ類、テントウムシ科など樹林内と林縁で見られる種が目立った。また、新次郎池の池畔では緩やかな小河川を好む種が確認でき、近くを流れる野川水系との連続性も確認できた。

クモ類の確認種は 27 種であり、前回調査の 21 種よりやや増加傾向であった。前回調査に引き続き新次郎池周辺ではオオシロカネグモが安定的に確認できた。林内ではハエトリグモ科が目立っていた。

これら昆虫類・クモ類相を維持するためには、植物の考察で述べたように土壌環境の維持がポイントになると思われる。

４）武蔵国分寺公園・真姿の池周辺

（１）植物

植物では、確認種は 389 種であった。前回調査は 347 種であり、増加している。

国分寺崖線の斜面上部から下部にかけて一体となったエリアで、湧水も相まって土壌の乾湿が連続し、それに合わせた植生が見られることが特徴である。全体としてカントウタンポポ、シュンラン、ヒトリシズカ、ニリンソウ、今回は確認されなかったがジロボウエンゴサクなど、春に開花する草本類が比較的多いことも特徴であった。

野鳥の森（P46 図Ⅲ－２－４参照）では在来種保全のための管理（希少種の調査、選択的刈り残し等）が実施されている。ジロボウエンゴサクは調査日が花期とずれたため確認することができなかったと考えられる。外来種では、春期はセリバヒエンソウ、夏期はボタンクサギとオオブタクサ、秋期はアレチヌスビトハギが目立ち、特にオオブタクサが増えているようである。

保護区内はコナラ林・シラカシ林・ケヤキ林と遷移しており、林内には日光がほど良く入るため、シュンラン、ムサシアブミなどの草本類が比較的多かった。

お鷹の道沿いではシダ類が豊富である。湧き水の多い国分寺において、シダ類はその環境を象徴する種である。そのため、今の個体が除草されないよう注意が必要である。一方で、重点対策外来種のキショウブも水路内で確認されたため、こちらは抜き取ることが望ましい。

湧水の多い国分寺には水路や池などが残っているため、残されている水辺環境を調査す

れば、他のシダ類の生育地が見つかる可能性がある。

水路内のキショウブ
（4月 18 日　お鷹の道周辺）

（２）鳥類

確認種は 36 種であり、前回調査の 28 種よりも増加傾向であった。武蔵国分寺公園には多様な環境があり、規模も大きく、調査を継続すれば確認種数は増加すると思われる。

武蔵の池では、前回調査では記録されなかった水鳥が記録された。また、カルガモの親子が人工浮島で確認されたことから、武蔵の池は公園管理者によって大変良く管理されている。池の管理の好事例として、市内の他の水辺でも同様の管理を行えると良い。

（３）哺乳類・は虫類・両生類

哺乳類の確認種は２種で、前回調査の１種と比べほぼ同じであった。広い面積の樹林内ではアズマモグラが安定的に確認できた。良好に保たれた土壌中には生存を支えるための十分な土壌生物相が維持されているようである。今回調査では確認できなかったが、調査地及び周辺の緑地では管理関係団体によるホンドタヌキの目撃情報もある。「令和４年度アライグマ・ハクビシン防除事業」では、泉町一丁目、東元町四丁目、西元町三丁目といった、公園を中心とした地域においてアライグマ又はハクビシンの目撃記録があるため、調査地域内で生息している可能性が高いと思われる。

また夏期調査時に、樹冠を飛翔するアブラコウモリを確認している。

は虫類の記録は１種のみで、前回調査の４種と比べて減ったが、環境的にニホンヤモリのほか、ヘビ類が生息している可能性は高いであろう。アズマヒキガエルなど両生類についても同様で、これらを対象とした調査、特にカエル類では繁殖時期を中心とした調査の実施によって確認できると思われる。

（４）昆虫類・クモ類

昆虫類の確認種は 227 種で、前回調査の 146 種と比べ、増加している。地表性のカメムシ類のほか、小型のガ類（ミノガ科、ツトガ科等）やハナアブ類といった種の新規確認が増加に繋がった。昆虫の確認種数に関しては、潜在的な母数が大きいので、調査の継続によって一定期間この傾向は続くものと思われる。

野鳥の森から閉鎖区域にかけての林相は、シラカシなどの葉を落とさない樹木が目立つことが、西恋ヶ窪緑地や姿見の池緑地と比較した場合の特色であろう。この林相を活かした管理も相まって、樹林性の昆虫相が見られるものと思われる。さらに公園北側には明るい草地のばったランドのような環境もあり、ススキやオギの群落に依存するショウリョウバッタモドキや、様々な花を訪れるハナバチ類といった昆虫を誘致している。

クモ類の確認種は 34 種で、前回調査の 31 種と比べ、やや増加傾向であり、昆虫類の存在にほぼ連動し、樹林性のオニグモ類やアシナガグモ科、ハエトリグモ科が目立つ結果となった。ばったランドにおいてもヤハズハエトリといった開放的な環境を好む種が見られ、樹林地と草地といったメリハリのある多様な環境の存在が良い影響をもたらしている。

（５）水生生物

水生昆虫類は 12 種（お鷹の道水路・元町用水６種、閉鎖区域・おたかの道湧水園 10 種）で、前回調査の 16 種（お鷹の道水路・元町用水 12 種、閉鎖区域・おたかの道湧水園 12 種)に比べやや減少した。

閉鎖区域内、「おたかの道湧水園」に併設された池では、前回調査実施後に池の改修が行われており、その後は元町用水との接続も良く、ヘドロ化した底泥も除去されており良好な水辺環境となっている。

源泉から池へ流れ込む区間は水深が非常に浅く、樹林に覆われ暗い環境となっているが、こういった水辺はトンボ等の生息環境であり、今回調査でも確認することができた。池については、出来うる限り現在の水域環境を維持するために、池上部を覆う樹木からの落葉を定期的に除去することが必要と思われる。

魚類は２種（お鷹の道水路・元町用水２種、閉鎖区域・おたかの道湧水園２種）で、前回調査では１種（お鷹の道水路・元町用水１種、閉鎖区域・おたかの道湧水園０種）の記録だった。

その他の水生生物類は 10 種（お鷹の道水路・元町用水６種、閉鎖区域・おたかの道湧水園７種）で、前回調査の 10 種（お鷹の道水路・元町用水６種、閉鎖区域・おたかの道湧水園９種）で大きな変化は見られなかった。

５）平兵衛樹林地

（１）植物

植物では、確認種は 119 種であった。種数については、前回調査は 107 種であり、同程度で微増している。

調査地の環境は前回調査と比較して大きな変化はなく、ヒノキとサワラ、シラカシの樹林であり、多様度は高くない。しかしながら、乾燥した林内を好むシュンランが今回初めて確認されたため、今後も追認していけると良い。

樹林に入り込んだモウソウチク
（４月５日　平兵衛樹林地）

林内は全体的に下草が少なく、樹木の根が露出している。その原因として、モウソウチクの葉が地表に溜まっていること、人がよく歩くために地表が固くなり、水が土に染み込まないので土壌や種子が流失していることが挙げられる。公園の隅などの人が入らない箇所には柔らかい土があるが、アズマネザサや外来種が繁茂している。改善策としては、土を柔らかくして土壌に水が入るようにするため、表層の土と下層の土とを入れ替える天地返しが有効だが、コスト面で現実的ではない。アズマネザサや外来種を駆除することで、残された土壌の植物の更新を行うと草本類の増加が期待できる。

右側は土壌が流出し、根が露出している
（10 月４日　平兵衛樹林地）

緑地は常緑樹のシラカシが優占種となっており、全体的に薄暗い。高木も多く、これ以上成長すると管理が難しくなる。公園も隣接していることから、大木のシラカシをシンボルツリーとして数本を残し、選択的に伐採し、伐採後は野鳥が食べる果樹を植えて利用者が楽しめるようにしても良い。

外来種のモウソウチクが引き続き確認されており、隣地からの侵入のため、竹林に置き換わる前に定期的な管理が望まれる。

（２）鳥類

確認種は 15 種であり、前回調査の 15 種と同数であった。確認された種類に関しても、前回と大きな違いはなかった。

平兵衛樹林地は狭いが、まとまった樹林地が隣接するため、周辺緑地のポテンシャルは高い。周辺緑地を行き来する鳥類が多く確認された。

アオゲラの幼鳥が採食場として利用していたが、周辺緑地で巣立ったと考えられる。

（３）哺乳類・は虫類・両生類

哺乳類は確認できなかった。モグラ塚などアズマモグラの生活痕は確認できていない。「令和４年度アライグマ・ハクビシン防除事業」では、光町一丁目内の当該樹林地周辺に

おいてアライグマもしくはハクビシンの目撃記録があるため、平兵衛樹林地及び隣接する屋敷林が生息域として利用されている可能性がある。

前回調査では、は虫類の記録はできなかったが、今回は１種を記録した。

（４）昆虫類・クモ類

昆虫類の確認種は 94 種であり、前回調査の 76 種と比べ、やや増加傾向であった。針葉樹主体の樹林であり昆虫相は単調であるが、林縁の一部に実生木の若木や草本類が生育した空き地的な場所が見られ、クルマバッタモドキや訪花性の小型ハナバチ類など飛翔移動してきた個体が記録できた。林内に生育する数少ないシラカシでは、夏期、樹液にシロテンハナムグリが密集するのが見られた。

クモ類の確認種は 11 種で、前回調査の 28 種と比べ、やや減少傾向であった。過度な踏圧による乾燥化が影響を及ぼした可能性がある。

６）西町四丁目緑地（新規調査地）

（１）植物

植物では、確認種は 117 種であった。

小さな祠と鳥居が設けられている。雑木林として人為的な影響を受けつつ、鎮守の森のような役割も持つ樹林であったと推察される。クヌギ・コナラ林の保護林だが、クヌギとコナラの本数は少ない。それらもカシノナガキクイムシによる食害もあり、枯損するのは時間の問題と思われる。ただし、林内は成長したエノキ林になっており、野鳥の飛来が期待できる。林床に生えるアズマネザサやトウネズミモチなどの外来種を定期的に駆除することで、草本類が増加する。駆除を行う際は、他の樹木の実生を切らないように気を付けるとなお良い。

コナラ、クヌギ林を保全するのであれば、コナラ・クヌギの実生を育てる一画を設ける必要がある。

近年になって植栽及び逸出したと見られるツリガネズイセンやオモト、ハナニラなどの外来・園芸草本が目立つ。

樹林内のツリガネズイセン（園芸種）
（４月５日　西町四丁目緑地）

（２）鳥類

鳥類の確認種は 20 種であった。

西町四丁目緑地は孤立した雑木林で、その周囲には畑地があり、このような林と開けた環境が接する場所は猛禽類等の採食地となる。

特定外来生物のガビチョウは生息していたが、鬱蒼とした樹林ではないため、定着はしていない。

（３）哺乳類・は虫類・両生類

今回の調査では哺乳類の記録はなかった。林内は明るい雑木林で、緑地の南側は畑地と接しており、この周縁部にアズマモグラが生息している可能性がある。今後哺乳類を対象とした調査が実施できるのであれば、センサーカメラ等を利用することによって、国分寺崖線でも北端に位置する当該地域における哺乳類相が確認できるであろう。

「令和４年度アライグマ・ハクビシン防除事業」ではやや南に離れてはいるが、西町一丁目から西町三丁目内においてアライグマもしくはハクビシンの目撃記録がある。将来的に当該調査地へも生息範囲を拡げる可能性がある。

は虫類の確認はなかったが、住宅地に隣接していることから潜在的にニホンヤモリが生息している可能性がある。両生類については、周辺に繁殖に適した水辺が見られないため確認は困難な可能性が高い。

（４）昆虫類・クモ類

今回の調査では 97 種の昆虫類が見られたが、小型のタマムシ類やオトシブミ科を中心としたコウチュウ類が目立っていた。これらは雑木林に見られる落葉広葉樹を好む種であり、調査地内に見られるエゴノキやヤマザクラ類、コナラ等を利用していると思われる。

クモ類では 12 種の確認が得られ、樹林地で平均的に見られるヒメグモやギンメッキゴミグモを確認している。

昆虫類、クモ類生息の面からは、引き続き雑木林の維持管理が望まれる。

７）西町五丁目緑地（新規調査地）

（１）植物

植物では、確認種は 198 種であった。

樹林の中央部は明るいコナラ林で、ガマズミやウグイスカグラといった落葉低木が生育する。孤立林ではあるが、土壌は良い状態で残っている。しかし、アズマネザサが繁茂し、樹木の成長によって、薄暗い林になりつつあるため、アズマネザサ刈りやキノコの生えたコナラを伐採し、明るい林にすると良い。また、コナラは成長すると大木になり管理が難しくなるため、中央の明るい場所で次世代のコナラを育て、15 年から 25 年ぐらいの頻度で伐採し更新する方が良い。

南側に進むに従い、常緑樹のヒサカキや林床のアズマネザサが成長し暗い環境となる。

また、北側も常緑樹のシラカシとモウソウチクの薄暗い林となる。常緑樹は高木が多く伐採が難しいため、枝打ちや剪定を行うことで日差しが地表届くようにすると良い。竹林は伐採をしているが、切口に水が溜まってしまいそこから蚊が発生している。人の利用を考えるなら根元から切る必要がある。

樹林全体に外来種のトウネズミモチやアカメガシワ、シュロの実生が目立つため、管理放棄地的な印象も受ける。これらの駆除やアズマネザサの刈り取りなどにより、多様度の向上や、雑木林の景観の維持・拡大を図ることができると考えられる。さらに多様性の高い林床を形成するポテンシャルは有していると考えられるため、一部の区画だけでも外来種の駆除やアズマネザサの刈り取りなどの実施が望まれる。

複数のアカメガシワの実生
（4月 28 日　西町五丁目緑地）

本調査地の林縁部
（7月 19 日　西町五丁目緑地）

（２）鳥類

鳥類の確認種は 17 種であった。

樹林性の鳥が中心ではあったが、緑地の一部に開放的な草地があるため、開けた環境を好むジョウビタキが見られた。

樹林内では、コゲラが春期に複数羽見られており、食痕も多数見られた。大木で枯損しているものがあれば、コゲラの繁殖や採食に役立つため、可能であれば、あえて残す管理を行えると良い。

（３）哺乳類・は虫類・両生類

今回の調査では哺乳類の記録はなかった。林床にアズマネザサが群生しヒトの立ち入りが難しい環境となっている区域が多いが、こういった空間はホンドタヌキやアライグマといった中型哺乳類が利用する可能性があるので、これらを対象とした調査が望まれる。

アライグマまたはハクビシンの記録があったが地域からはやや距離が離れているが、西町四丁目緑地と同様、将来的に当該調査地へも生息範囲を拡げる可能性がある。

は虫類の記録はなかったが、比較的面積のある緑地なので、は虫類が潜在的に生息している可能性が高い。

（４）昆虫類・クモ類

昆虫類の確認は 122 種であった。林内は西町四丁目緑地に比べると下草にアズマネザサが入り込み単調で全体に暗いが、クヌギ等の立ち枯れに集まる寄生蜂（朽木内に生息するカミキリムシ科などの幼虫に産卵）やゴミムシダマシ科、サトキマダラヒカゲ等、樹林性の昆虫が中心に見られた。アズマネザサの繁茂をコントロールし、安全に配慮しながら立ち枯れ木を適切に利用することによって、林内の昆虫相はより多様化できるであろう。また緑地の北側に一部下草を刈り込んだ開放的な草地環境があり、ここではツユムシやヒナバッタ、ベニシジミといった明るい草地を好む種が確認できた。こういったメリハリのある環境状態が両立していることも多様な昆虫類の生息を促している。

クモ類の確認は 18 種であり、林内ではカラオニグモやジョロウグモといった樹林性のクモ類が見られた。昆虫類とほぼ同様の様相を確認できているので、下草環境を含め、雑木林を維持する管理体制であれば引き続き生息は担保できるであろう。

Ⅶ　今後の展開

１．専門員調査

１）調査の継続について

本調査期間中において、市内に生育・生息する動植物の状況を把握できた。全体像を把握するには定期的な調査を行うことが重要であり、それにより市内の生物相の変化（希少種や外来種）を把握でき、ひいては市内の自然環境の変化も把握できる。今回の例でいえば、前回調査で記録のなかったヤマサナエの新たな確認、ガビチョウの分布拡大傾向等である。これからすると、８年後にほぼ同様の調査を実施できたことは貴重である。

他自治体の事例において、杉並区などでは５年ごとに調査を実施している。そういった事例を参考に今後もモニタリングを継続する必要がある。

２）調査地の検討

今回の調査では、公有地を中心に市内７箇所の公園や緑地を調査対象とした。民有地においても、今後関係者などとの調整を行い協力が得られれば、新しい種を確認できる可能性が高く、動植物の生息・生育データの充実とともに、市内の生物相の全体像が把握できるものと考えられる。

また、専門家ヒアリング時に多く聞かれた点として調査地の偏りについて、中央部～南部に偏っているので、これから先も継続的に調査を実施する場合、北部の都市公園、社寺林や屋敷林などとともに、国分寺崖線の特徴となる湧水などの水辺環境の変化も大きいことから、こうしたことを含めて今後はまだ把握できていない地域においても調査地を選定することが必要である。その場合調査対象地が増加するので、調査地を地域ごとに整理し、各年調査（例：A 区域数地点を偶数年に実施、B 区域数地点を奇数年に実施、など）を実施することも考えられる。

３）調査方法の検討

前回調査を踏襲し、今回の調査でも目視確認を中心とし、昆虫類や哺乳類を対象とした特別な仕掛けなどは用いなかったため、まだ未発見の種が多いと考えられる。専門家ヒアリング時に多く聞かれた点として、今後は地表徘徊性種を対象としたベイトトラップやピットフォールトラップ、また夜間のライトトラップなどを行えると良いとのことである。哺乳類においてはシャーマントラップなどの仕掛けを用いることでネズミ類など小型種を、センサーカメラを用いることによって夜行性の中型哺乳類を対象にできる。さらに夜間調査ということでは「鳴く虫」や、両生類なども確認が容易になると考えられる。

またアズマヒキガエルなど両生類については、産卵時期がおおよそ絞れるので（２月末から３月上旬)、これらを踏まえ、動植物調査は早春に調査開始を設定することも考慮したい。

４）調査対象種群の検討

クモ類については、潜在的に見られるはずの一部の種が記録に残らなかったことから、土壌性種を中心にしたクモ類の調査を実施しても良いのでは、との専門家ヒアリング時の意見もあった。このため土壌性生物という事であれば季節を問わず実施できるので、冬期に実施ということも考えられる。

また可能であれば、港区のように菌類や、練馬区のように陸産貝類などについても対象種にすることで、市内の生物多様性を検討するうえでの貴重な資料が得られると考える。

５）多様な団体との共同調査

市内で活動する団体と共同で調査を実施できれば、多くの人が生きものを探索することで、確認種の増加が期待される。特に、目につきやすい大型の種が多く発見される。アズマヒキガエルの卵塊のような、目立つが出現期間が限られている種の調査については、現地で活動している団体と協力することで大きな成果をあげられる。

また、団体にアカデミックな調査の内容を知ってもらう機会にもなり、市民調査員の育成にも貢献することができる。

２．生物多様性地域戦略策定に向けた基礎データとしての活用

市内の生物多様性の保全や持続可能な利用に関する施策を総合的・計画的に推進するために、「生物多様性地域戦略」を策定することが求められる。市では第三次国分寺市環境基本計画（令和７年３月策定予定）を検討しており、本調査結果等を活用しながら、この環境基本計画に「生物多様性地域戦略」を包含する形で進めている。

内容に関しては、生物多様性国家戦略 2023-2030 で掲げた 2050（令和 32）年ビジョンの「自然と共生する社会」を目指し、2030（令和 12）年までにネイチャーポジティブを実現するための５つの基本戦略を考慮した施策を掲載することが求められる。

また、第三次国分寺市環境基本計画を考える上では、策定後の展開が重要である。社会情勢の変化へ柔軟に対応するため、施策や目標の進捗についての点検を定期的に行い、必要に応じ計画の見直しを行う必要がある。本市で策定する「生物多様性地域戦略」に関しては、上位計画を踏まえ、短期目標を 2030（令和 12）年度、長期目標を 2050（令和 32）年度を参考に設定する。

３．本市における生物多様性の保全に係る具体的施策等の展開に関する基本方針

令和５・６年度にかけて別途国分寺市環境基本計画の改定作業を進めており、新しい第三次国分寺市環境基本計画（令和７年３月策定予定）に包含した形で、本市の地域特性を踏まえた生物多様性地域戦略を策定することとしている。今後、下記事項を踏まえ、具体的な検討を進めていく。

１）法的位置づけ

・生物多様性基本法 13 条第１項

「都道府県及び市町村は、生物多様性国家戦略を基本として、単独又は共同により、当該都道府県又は市町村の区域内における生物の多様性の保全及び持続可能な利用に関する基本的な計画（以下、「生物多様性地域戦略」という。）を定めるよう努めなければならない。」と定められている。

２）地域戦略の意義

- 市内における生物多様性の現状と課題を共有し、国分寺崖線など市の自然環境の成り立ちや自然の恵みなどを再認識しつつ、多くの主体（市民、市民団体、事業者、企業、学校、専門家等）を巻き込みながら、地域の活力で自然を守り育て、自然を使って地域を元気にし、地域課題を解決し、魅力的なまちづくりを進める。

３）計画期間・将来像・目標設定の検討に向けて

- 計画期間の設定においては、昆明・モントリオール生物多様性枠組や、国家戦略、東京都戦略の計画期間との整合、国分寺市ゼロカーボン行動計画の計画期間を踏まえ、令和 12（2030）年を目標年が望ましい。
- 将来像はできる限りイメージしやすい表現に努める。
- 生物多様性国家戦略 2023-2030 では 2030 年ネイチャーポジティブに向け、５つの基本戦略が掲げられており、地域戦略の目標を設定する際、これらの基本戦略の状態目標・行動目標を参考にする必要がある。
- 「国分寺の自然」「国分寺崖線」「歴史と自然」「多様性」などのキーワードをもとに、ステークホルダーが共有できるキャッチフレーズを検討する。

４）対象区域

- 市内全域

５）地域特性

- 本市は、東京都のほぼ中央部に位置し、面積は 11.46 ㎢で、東西方向に 5.68㎞、南北方向に約 3.86㎞ の広がりをもっている。
- 市域は、高台上の平坦地である武蔵野段丘と、国分寺崖線を境に一段低い立川段丘で構成されており、市域の西部から東部方向に向かって緩やかに低くなっている。
- 標高は、最も高いところで約 92m（西町五丁目・けやき台付近)、最も低いところで約 55m（東元町一丁目・鞍尾根橋付近）となっている。

・ 本市の地形の特徴である国分寺崖線は、約５万年前、立川台地の形成期に多摩川が武蔵野台地を浸食してできた浸食崖で、立川市の砂川九番周辺から始まり、市内の西町五丁目から光町一丁目、西元町付近へと続き、さらに野川に沿って大田区丸子橋付近まで続く、東京を代表する崖線である。
・ みどり率は 34.8%（平成 30 年度）であり、国分寺崖線をはじめ、お鷹の道・真姿の池湧水群などの湧水があり、農地が多く点在している。

６）方針案

生物多様性の保全に係る具体的施策について、その方針案を以下に示す。

（１）生物多様性に関する情報収集・提供

本市には、多様な生きものが生育・生息している。これらの生きものを守るためには、生きものの生育・生息情報を収集し、評価、解析をする必要がある。

①動植物の生育・生息状況の把握

・動植物の生育・生息状況の変化を把握するため、専門調査員による定期的なモニタリング調査（概ね５年おきなど）を実施する。また、補足的に特殊環境に生息する種（土壌生物・地表徘徊性生物・夜行性種など）や、カエルの産卵確認のための調査などを定期的なモニタリング調査の中間時期に実施する。
・確認種数等を増やすため、伝鎌倉街道沿いの緑地や民有地の屋敷林などを調査地点の追加を検討する。農地などの民有地や都市公園も調査範囲に含めることができれば、生物多様性の基礎データの充実を図ることができる。
・国分寺市の自然環境の大きな特徴である「国分寺崖線・湧水」の生態系においては、水辺環境の変化が大きいことから、水生生物の調査の充実を図る。

②国分寺の地域特性を踏まえた分析・評価

・国分寺崖線をはじめとした連結性のある緑や公園・農地・民有地の点で繋がる緑などの特徴を踏まえ、生物多様性の基本方針を定める。

③国分寺版レッドリスト作成

・国や東京都の絶滅のおそれのある野生生物の種のリストをもとに、今後も定期的な動植物調査を実施しながら、国分寺版レッドリストを作成する。
・レッドリストを公表し、希少種の保全に向けた取組を展開する。

④生物多様性の保全に関する啓発活動

・市ホームページのほか、体験型イベントやパネル展示などを実施し、生物多様性の保全に関する啓発活動を展開する。
・近隣自治体の取組や環境団体の紹介など、自然環境の保全活動を紹介する。
・生物多様性に配慮した生活（花壇やプランター設置など）などの情報提供を行う。

⑤市民参加型調査の実施

・市民の普及教育を兼ねて、市民参加型の生きもの調査を実施する。多くの人が生きものを探索することで、確認種の増加、生きものへの関心が高まり、地域への愛着も深まることが期待される。
・小中学校と連携しながら、次世代を担う子ども達が生きものに関心を持ってもらうようコンテンツを検討する。
・国や東京都、市町村（立川市など）で行われている web 環境やスマートフォンのアプリなどを活用して生きものの目撃情報の収集する手法やデータベースなどを検討する。

（２）生物多様性の保全

本市には多様な動植物の生育・生息が確認され、豊かな生態系が成り立っている。しかしながら、外来種の増加や質の高い緑地の減少等により、今ある自然の生態系が脅かされている。これらの課題を解決するために、適切な維持・管理を行い、保全に向けた取り組みが必要である。

①生物多様性に配慮した公園・緑地等の整備及び維持管理

・公園や緑地等の新設・改修に当たっては、残された小さな自然や市内各地域の学校に、拠点となる多様な生きものが生息・生育できる環境（ビオトープ）の整備を検討する。
・樹林地等の維持管理においては、バッタなどの昆虫類が棲めるよう下草を一部残して刈るなど、生物多様性に配慮した公園・緑地等を整備する。
・水辺においては、ヤゴ（トンボの幼虫）などの水生昆虫、アブラハヤやジュズガケハゼなどの小魚が棲めるようにかいぼりを行い、水質の改善を図る。
・現状では市民団体による維持管理が行われていない緑地では、生物多様性の質を高める維持管理計画を立て、保全を行う。

②希少種の保全

・国分寺市には、環境省レッドリストや東京都レッドリスト掲載種を含む貴重種等が生育・生息していることから、希少種に着目した生育地・生息地の保全及び環境の整備を行う。
・キンランやギンランなどの生育環境を創出するための樹木更新や、国分寺市内では営巣環境が少ないフクロウのために巣箱設置、湧水に依存する種(オニヤンマ、ヤマサナエ)の保全のためにセキショウなど抽水植物を刈りこみ、開放水面の確保等を行う。

③外来種の対策

・特定外来種に指定されているアライグマやハクビシンなどの生息情報を把握し、計画的な防除対策を継続的に進めていく。
・在来植物の芽生えや生育への阻害が大きい外来植物を優先し、効果的な駆除対策を講じる。特に、特定外来種に指定されているオオカワヂシャは、在来種のカワヂシ

ャとの交雑や種子の伝播による下流への影響が懸念されるため、早急な対応を検討する。
・姿見の池など水生生物に影響を与えるアメリカザリガニ、アカミミガメ、コイ（ニシキゴイ）の駆除を検討する。
・潜在的な脅威となりうる特定外来生物などに関して、侵入しない・させないために市民への広い認知活動を行う。あわせて、一方的な排除ではなく、「命の大切さ」とともに伝える。

④自然共生サイトの登録
・環境省では「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」を「自然共生サイト」に認定する制度を行っている。「自然共生サイト」認定によって、その場所の生物多様性の価値の維持又は質の向上が促進され、日本における 30by30 目標の達成に貢献するとともに、生物多様性の保全にポジティブな効果が波及していくことを期待されるために、自然共生サイトの登録を促進する。

⑤市民協働の支援及び拡大
・姿見の池緑地や西恋ヶ窪緑地などでは、市民協働による維持管理が行われている。それらを支える市民団体への支援体制や協働関係を構築し、活動の継続及び発展を促進する。
・生きものの生息・生育空間は、市域に限定されないことから、希少種の保全や特定外来種対策などについて近隣自治体及び地域活動をしている団体と情報交換し、必要に応じて連携した対策（共同イベント、調査など）を講じていく。

（３）国分寺市の自然の魅力発信・活用
地域に愛着を持つ人が増えることで、保全活動は推進する。そのために、まずは国分寺の豊かな自然環境への関心を高めることを目指し、自然とふれあう機会の充実及び魅力発信を行う。

①自然環境にふれあう機会の推進
・幼少期から自然環境や生きものを大切にする心を育むために、自然とふれあう機会（体験型イベント等）の創出・充実を図る。
・古道（伝鎌倉街道等）を歩きながら、人々が生活した形跡を偲び、武蔵野の自然に親しむような企画を立案する。
・国分寺市の自然の魅力を発信するため、動画配信などを含め戦略的な情報発信を行う。

②（仮称）自然観察・生きものハンドブックの発行
・希少種の情報には注意しつつ、動植物調査によって見つかった生きものの情報をマップにまとめ、国分寺市における生物相や自然環境の特色などを整理する。
・多くの市民に対して、生きものに興味関心を持ってもらうために、写真をできるだ

け多く取り入れてわかりやすく紹介する。

7）推進体制の構築

- 地域戦略を推進するための仕組みとして、地域戦略を推進・管理する部署を明確に位置付ける。
- 外来種対策においては、庁内関係課が連携して様々な主体の参加・連携を図り、協働による実施体制の構築につなげるなど、横断的な取組が必要となる。計画の効果的な実施を図るため、近隣自治体等との連携も必要となる。

引用・参考文献及びウェブサイト

全般

・東京都環境局自然環境部 編（2023）：レッドデータブック東京 2023
東京都の保護上重要な野生動植物種（本土部）解説版，東京都環境局自然環境部.
・国立環境研究所侵入生物データベース
https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/
・生態系被害防止外来種リスト
https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html
・東京の名湧水 57 選
https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/water/conservation/spring_water/tokyo/
・ECO ネット東京 62「62 市区町村における地球温暖化対策関連計画等の策定状」
https://all62.jp/sakutei/sakutei4.html
・立川市「みんなでつくろう！立川いきものデータベース」
https://www.city.tachikawa.lg.jp/kankyotaisaku/ikimonodatabase.html

植物

・東京都環境局　23 国分寺姿見の池緑地保全地域
https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/natural_environment/tokyo/area/23_sugatami.html
・特定外来生物の解説：オオカワヂシャ
https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/list/L-syo-05.html
・植物和名－学名インデックス　YList　http://www.ylist.info/
・神奈川県植物誌調査会編（2018）：神奈川県植物誌2018，神奈川県立生命の星・地球博物館.
・環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 編（2014）：レッドデータブック 2014 －日本の絶滅の恐れのある野生生物－8　植物（維管束植物），ぎょうせい.
・いがりまさし（1996）：山渓ハンディ図鑑 6　日本のスミレ，山と渓谷社.
・谷城勝弘（2007）：カヤツリグサ科入門図鑑，全国農村教育協会.
・木場英久ほか（2011）：イネ科ハンドブック，文一総合出版.
・林将之（2014）：山渓ハンディ図鑑 14　樹木の葉，山と渓谷社.
・桶川修（2020）：くらべてわかるシダ，山と渓谷社.

鳥類

・環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 編（2014）：レッドデータブック 2014 －日本の絶滅の恐れのある野生生物－2　鳥類，ぎょうせい.
・日本鳥学会（2012）：日本鳥類目録改訂第 7 版，日本鳥学会.

哺乳類・は虫類・両生類

・標準和名選定委員会（2003）：日本産爬虫両生類の標準和名の決定，爬虫両棲類学会報 2003（1）　p.55-60.
・国立研究開発法人 国立環境研究所　生物・生態系環境研究センター
（ニホントカゲの中から発見された新種「ヒガシニホントカゲ」の記載について）
http://www.nies.go.jp/biology/research/pu/2012/1208.html
・日本爬虫両棲類学会ウェブサイト　日本産は虫両生類標準和名
http://zoo.zool.kyoto-u.ac.jp/herp/wamei.html

昆虫類・クモ類

・上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝 編著（1985）：原色日本甲虫図鑑Ⅱ，保育社.
・環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 編（2014）：レッドデータブック 2014 －日本の絶滅の恐れのある野生生物－　7　その他無脊椎動物（クモ形類・甲殻類等），ぎょうせい.
・環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 編（2015）：レッドデータブック 2014 －日本の絶滅の恐れのある野生生物－　5 昆虫類，ぎょうせい.
・黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之 共著（1985）：原色日本甲虫図鑑Ⅲ，保育社.
・酒井香・藤岡昌介（2007）：日本産コガネムシ上科図説第２巻食葉群Ⅰ，昆虫文献 六本脚.
・新海栄一（2006）：ネイチャーガイド　日本のクモ，文一総合出版.
・寺山守･久保田敏･江口克之（2014）：日本産アリ類図鑑，朝倉書店.
・日本直翅類学会 編（2006）：バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑，北海道大学出版会.
・安田守（2010）：イモムシハンドブック，文一総合出版.

水生生物

・環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 編（2015）：レッドデータブック 2014 －日本の絶滅の恐れのある野生生物－　4　汽水・淡水魚類，ぎょうせい.
・豊田幸詞･関慎太郎（2014）：日本の淡水性エビ・カニ：日本淡水産・汽水性甲殻類 102 種，誠文堂新光社.

協力環境団体（８団体）

・美しい用水の会
・エックス山等市民協議会
・特定非営利活動法人国分寺市にふるさとをつくる会
・国分寺姿見の池緑の会
・都市緑化を考える会
・野川源流みどりの会
・特定非営利活動法人まちづくりサポート国分寺
・緑と自然を育てる会

（五十音順）